深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「和泉の国までと、平らかに願立つ。」（七五・3）とあるが、『土佐日記』旅程図も参考にしながら、「和泉の国まで」としているのはなぜか、考えてみよう。**

【答】 和泉国は畿内に分類され、治安も安定していた。また、その先からは内陸の河川を通る道筋となり、転覆や海賊等の危険が少なくなるから。

▼ポイント▲ 口絵の「旧国名・都道府県名対照図」を見ると、和泉は都と同じ「畿内」の範疇に入っていることが分かる。また、「旅程図」を見ると、和泉の先の摂津からは河川に入っていったことが分かる。外洋と河川の違いを考えてまとめるとよい。

2 **「八木のやすのりといふ人あり。」（七五・6）とあるが、作者は「八木のやすのり」をどのように評価しているか、「国人」と対比して、まとめてみよう。**

【答】 特に召し使っていた者でもないのに、盛大な送別をしてくれたのは、真心を持った者だと評している。ふつうは「国人」に代表されるように、都に帰ってしまって関わりのなくなる人にそこまでのことはしないものである。

▼ポイント▲ 「二十三日」の項目に書いてあることをまとめる。「国人」は「心ある者」と対比されており、「八木のやすのり」は「心ある者」と考えられていることを読みとってまとめる。

言葉と表現の解答例

1 **次のそれぞれの表現のおもしろさについて、考えてみよう。**

(1) **船路なれど、馬のはなむけす。（七五・3～4）**

(2) **潮海のほとりにて、あざれ合へり。（七五・4～5）**

(3) **一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。（七五・11）**

【答】 (1) 「馬のはなむけ」は「送別の宴」という意。しかし語源的には、旅立ちにあたって行く先の方角へ乗馬の鼻先を向けてやる習俗に基づく。ここはその語源的意味を生かして、馬には乗らない船旅と「馬のはなむけ」という言葉との間に矛盾を感じ取り、そこにおかしみを見出している。

(2) 「あざる」には「(魚などが)腐る」意と「ふざける」意とがある。ここは船に乗るべき海のほとりの送別の宴で、皆が酔っぱらってふざけあっている、という意味であるが、「あざる」に「腐る」の意もあるので、「潮海」の塩気(腐敗を防ぐ)と「あざれ」の腐敗とに矛盾を見出し、おもしろがっているのである。

(3) 「一」という漢字を知らない無教養な者が、酔っ払って、足

の動きが「十」という漢字になっているところ。

▼ポイント▲「船」と「馬」、「一」と「十」などの矛盾した言い方によるおもしろさと「あざる」という語を二つの意味に取ることによるおもしろさとがある。例に応じて説明する。

言語活動の解答例

1　**「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」（七四・2〜3）とあるが、作者は女性に仮託することによって、どのようなことをこの日記に書こうとしたのか、「男の文章と女の文章」（八一〜八二ページ）を参考に、話し合ってみよう。**

【答】（意図）『土佐日記』の仮構性がその表記や内容と関わることを考えることで、当時の文学作品の成立について理解を深めることができる。

（手順）

1　「男の文章と女の文章」の中から男の文章と女の文章との違いについて読み取る。内容としては、男の文章は「世の中のこと」や「政界メモ」であり、女の文章は「自分のこと」を書いている。表記についても確認しておくと、男の文章は漢文によるもので、女の文章はひらがなによるものである。

2　「門出」の内容を考え合わせて、女性に仮託した意味を考える。日時とそれに続く部分には比較的公的だと考えられることが書かれているが、二十一日、二十二日の送別の宴の話、二十三日の八木のやすのりの話などは「自分のこと」と考えられる。作者はこの日記に「世の中のこと」にとどまらない、私的なことも書いてみようと考えて、女性仮託を行ったと考えられる。従来の日記とはまったく別の形のものを創作しようと考えていた。

（ゴール）橋本治氏の文章を参考にしながら、『土佐日記』以前の日記がどのようなものであったかをまとめ、「門出」の内容とを考え合わせて、作者の創作の狙いをまとめる。何人かのグループで意見を交換しながら、まとめていけるとよい。

▼ポイント▲「「男の文章と女の文章」を参考に、」とあるから、男性と女性の違いをそこから読み取ることが大切である。内容と使用文字の二点から押さえることができる。それを踏まえたうえで、作者の意図を考えることになる。

（畠山　俊）